

IATSS三十周年によせて

思い出すままに

大場義夫 東京大学名誉教授

1944年9月(半年繰上げ)東大医学部医学科卒。短期現役軍医志願。軍医中尉。46年東大医学部衛生学教室助手、53年東大教育学部体育学健康教育学科健康教育学コース助教授を経て75年同教授。80年定年退職。同年獨協大学教養部教授。90年定年退職。



怠惰な私は東大医学部に二浪で入ったが、軍隊生活が短く済んだことは幸せだった。旧制東京高校の仲間のうち現役入学では3名中1名が巡洋艦那珂でトラック島沖で戦死、一浪の1名(私の親友)はシベリア抑留となり帰国数年後にぽっくり病で急死している。私は歩兵第273連隊本部付軍医で終戦を済州島で迎えた。なお医学部同期では2名が戦艦大和、1名が広島原爆で亡くなっている。

在学中から臨床医は不適と悟ったので衛生学教室助手となり、昭和28年に新設の教育学部体育学健康教育学科(東大で最長の学科名)健康教育学コースの助教授になった。昭和33年、当時問題になっていた「すしづめ教室」(戦災による校舎復旧の不十分と「団塊の世代」が成長して就学してきたため)の環境衛生学的調査報告をしたところ、その後の文部省の基地周辺防音教室環境衛生学的調査委員会ではメンバーにされた。

昭和39年、「潜在危険論」提唱の須藤春一教授を迎えた研究室は、それ以来安全教育の研究が活発になり、学生や院生の論文もそれに関するものが多くなった。ちなみに「潜在危険論」の根本は「既にわかっている危険は注意するので事故にならないが、まだ気づかれていない危険が事故につながるので、この潜在危険の早期発見、早期除去の能力を養うことが大切である」ということである。「安全能力」の造語も須藤教授によるものである。私も子どもの安全教育の研究に取り組んだが、そのため幼稚園、保育園や小中校の先生方への講演依頼も多くなった。また仙田満教授(東工大)が各地に大型の子どもの遊び場を作る際は私と体育関係者から成る委員会が必ず安全の点からチェックすることを今も続けている。

昭和51年に私たちが創立した日本児童安全学会は諸般の事情で活気がないが、この学会をやや引き継ぐ形で平成11年創立の日本安全教育学会は年毎に盛んになっている。そして須藤教授の下で育った院生が今や大学教授などになり学会の役員を務めたり研究発表をしている。須藤教授とも親しかった吉田瑩一郎会長は文部省から日体大に移り名誉教授になられた方である。

国際交通安全学会については創立時からの会員だが、私の研究室に来られた西田通弘氏から会員になるようご依頼を受けた時のことは今もはっきり記憶している。研究調査プロジェクトも数寄屋橋スクランブル交叉点の調査を皮切りにいくつにも参加させていただき、学会誌の編集委員も当初から何年か務めさせていただいたが、加齢と共に疎遠になった。しかし毎年の研究発表会と総会には予定表への開催日誤記に基づく1回の欠席を除けば皆勤を続けている。学会には浅学非才のためお役に立たなかったことをお詫びすると共に私としては大いに勉強させていただいたことを深くお礼申し上げる次第である。

私は85歳。年齢の割には健康と思うが、その原因は、(1)高校時代からウォーキングをしている、(2)楽道家である、(3)家族が栄養満点の料理を作ってくれる、(4)喫煙しないことかと思う。アルコールに目が無いのが玉に瑕だが。かつて玄米食が健康に良いと奨励された某先生は、もし短命で終りそうな場合は面目が立たないので交通事故でも死ななければならぬと言われたが、健康教育学と安全教育学を専門にしてきた私は、事故を起こさず事故に遭わず、心身共に元気で、寝た切りやボケ

にもならず、周囲に迷惑もかけずに長生きしてPPK(ピンピンコロリ)といきたいと思っているが、果してどうなることか。